

《資 料》

オーストリア学派創始者達の
関係資料の現況

八 木 紀 一 郎

“オーストリア学派”は、経済学史に登場する多くの潮流の中でも、その特徴的な理論的観点の保持の面からみても、またその人間的結合の緊密度の点からみても、もっとも“学派”らしい学派の一つといえよう。この“学派”を外観上、特徴づけるものは、何よりもその対抗的性格である。メンガー (Carl Menger, 1840-1921) とその弟子ベーム＝バヴェルク (Eugen von Böhm-Bawerk, 1851-1914)、ヴィーザー (Friedrich von Wieser, 1851-1926) の始祖の世代にあっては、この学派の他潮流に対する対抗的性格は、古典派に対立した価値論の提示と、歴史学派に対する“方法論争”を通じて示された。それは、ミーゼス、ハイエク以降の「現代オーストリアン」⁽¹⁾にあっては、マクロ経済学および計量経済学に対する反対、政府干渉および社会主義に対する反対というように、相手をかえながらも維持されてきている。“オーストリア学派”は、現在でも生命力をもった“学派”かもしれない。

しかし、私達が経済学史家として、始祖の世代の“オーストリア学派”を研究しようとする時には、いうまでもないことだが、私達の頼るべきものは、外観上の“対抗関係”やそれについての思いこみではない。ある“学派”の特徴を、それが対抗した相手によって認識するというのは、あまりに消極的な態度といわざるを得ないし、また、時代と環境を異にする「現代オーストリアン」の自己理解から、生成期の“オーストリア学派”を規定

(1) たとえば, Dolan, G. (ed.), The Foundation of Modern Austrian Economics, Kansas City: Sheed & Ward, 1976.

することも誤りである。必要なものは、しっかりした資料的基礎であるはずである。

“オーストリア学派”の始祖3人については、たしかに、それぞれ小論文も含む著作集が没後に編集され、研究に便宜が与えられている。しかし、それらは公表された著作から選択された論文集であって、ただ一つの例外を除き、彼らの理論の形成過程や、理論確立後の反省、さらに教育活動や、彼らが政治や行政に参与しておこなった活動をうかがうことのできる資料は含まれていない。これは、ワルラスの研究がジャッフェ編の往復書簡集 (Correspondence of Léon Walras and Related Papers, Edited by William Jaffé, 3 vols., Amsterdam: North Holland, 1965.) に、また、ジェヴォンズの研究がコリソン・ブラック編の資料集 (Papers and Correspondence of William Stanley Jevons, Edited by R.D. Collison Black, 7 vols., London: Macmillan, 1972-81.) に立脚しうるのに比べ、不利な条件である。

私は、最近の5年間、メンガーを中心にオーストリア学派の研究をおこなってきたが、研究の基礎となる資料の探索にも力を注がざるを得なかった。その結果、メンガーとベームについては、いくつかの資料を発見（あるいは再発見）することができた。“オーストリア学派”の研究は、今後は、種々の刺激を得て徐々に進展していくと思われるが、学史研究が恣意的な解釈の段階を脱するには、一方での透徹した理論的視野とともに、多面的な資料的基礎が必要である。

本稿では、私の知る範囲でこの学派の始祖達の残した資料の現状について整理し、同学者および私自身の研究の便宜をはかりたい。ただし、ミュンヘンの Philosophia Verlag が企画している INTERNATIONAL CARL Menger LIBRARY. Eds.: K.R. Leube and A.H. Zlabinger では、メンガーの論文集と伝記が予告されているので、これまで知られていなかった資料のいくつかがそこで公開されるものと期待される。したがって、メンガーについては、この企画の実現後、補足の必要がでてくるであろう。

資料探索の経過

オーストリア学派関係資料の収集は、私の場合、1978年に、一橋大学のメンガー文庫の探索から始まった。同大学「社会科学古典資料センター」の管理下にある同文庫には、この学派の1910年頃までの文献がほとんどそろっているだけでなく、メンガー自身の書きこみの残された文献が多数保存されているのである。E. カウダーは、1958年と1960-61年

の2回の国立滞在の際に、これらの書きこみを調査して報告を書くとともに、重要な2点の書きこみの全文解説を公表している。私は、カウダーにならって、書きこみを手がかりに、メンガーの壮年期・晩年期の関心の所在を探索し、その結果、各段階ごとの彼の関心の方向が、自著『経済学原理』の改訂作業の紆余曲折と結びついていることを、かなりの程度明らかにすることができた。⁽³⁾

その次には、私は、メンガーと古典派の関係について興味をもち、メンガーがチュルゴー、スミス、リカードウ、J・S・ミルの主著にのこした書きこみに注目し、そのうちスミスとリカードウへのそのの解説をこころみた。リカードウ『原理』への書きこみは、量も少なく解説も容易であったが、スミスの方は、公表できる程度の完成度にこぎつけることができずに現在にいたっている。

そうこうするうち、1980年の秋、私は自分の足元の岡山大学図書館に、メンガーとベームの講義録（未製本プリント、計3点）が保存されていることに気づいた。これは、京大教授で六高の校長でもあった黒正巖氏の文庫の中にあったもので、氏の欧州留学（1922—25）時の収集になるものと推測される。この資料の発見後、私はヴィーン大学図書館に照会してメンガーの講義録4点のコピーを入手したが、今春（1982年春）の調査旅行の際にも、ザルツブルクで3点を確認し、結局、この種の資料5種10点を調査することができた。また、これはプリントではなく筆録そのものであるが、清書された講義録風の冊子（4冊）が、ベーム教授による Nationalökonomie という標題のもとに保存されていることを、つい先頃（1982年夏）に発見している。

私は、これらの資料についてのインフォメーションを得るために、事情を知る残り少ない人と思われる、ハイエク教授とカウダー教授に教示を乞うた。両氏の説明では、これらは、オーストリアの大学に固有な Skripten とよばれる講義録で、授業をうけない学生の需要にこたえて、人気教授の講義録を石版印刷で刊行したものだということであった。両

(2) Kauder, E., "Menger and his Library", The Economic Review, Hitotsubashi University, vol.10, no.1 (Jan. 1959) ; "Freedom and Economic Theory", Hitotsubashi Journal of Economics, Sept. 1961. ; A History of Marginal Utility Theory, Princeton: Princeton Univ. Press, 1965.

(3) 拙稿「メンガーの『経済学原理』改訂作業」、『岡山大学経済学会雑誌』第11巻2号（1979）；「メンガーとヴェーバーにおける経済理論と〈経済人〉Ⅱ」，同第11巻4号（1980）。

氏はこの説明に、書記は必ずしも講義を理解しているわけではなく、また数人の講義を一諸にしてしまう時もあるので、その内容は無条件に信頼できるものではない、という注意をつけ加えてくれた。しかし、私は、この資料の出現により、オーストリア学派の本拠地ヴィーンでの、メンガーおよびベームによる経済学教育の実態が明らかになるだろうと考えた。

1982年の春、私は西ドイツ、オーストリアに調査旅行をおこなったが、この旅行の成果は、メンガーよりも、ベーム関係の方に豊かであった。私は、ザルツブルク大学の法学部の一室に保存されているハイエクの文庫の中に、ベームの最初の利子論手稿(1876年)と、1885年の新年をはさんだベームとメンガーの「資本用役」をめぐる二通の書簡のうつしを発見(再発見)し、また、ヴィーンでは、ベームの蔵書と文書類の一部が、経済理論研究室に残されていることを確認することができたのである。ハイエク文庫の資料については、ベーム＝バヴェルク理論の形成過程を物語るきわめて重要な資料と考えられるので、本稿とはほぼ同時期に印刷・刊行される予定の一橋大学社会科学古典資料センターの Study Series で公表されることになっている。

以上が、これまでの私の資料探索の概要である。

主要著作と論文集

まずはじめに、3人の主要著作と論文集の検討から入りたい。

メンガーには、ハイエクの編集した4巻の著作集 *The Collected Works of Carl Menger*, 4 vols. (London School of Economics and Political Science. Series of Reprints of Scarce Tracts in Economics and Political Science, no.17-20), London: Publication Dept. of L. S. E., 1934-36. があり、これにはメンガーの刊行した『経済学原理』(1871)『方法論研究』(1883),『歴史主義の誤謬』(1884)の三著作が写真版で覆刻されている他、論文についても主要なものがおさめられている。この著作集には、ハイエクの有益なメンガー伝が第1巻巻頭にあるだけでなく、第4巻の巻末には、詳細な著作目録が付されている。この著作集は、メンガーの令息が父の没後企画した遺稿を含む全集の挫折のあとをうけたものと考えられるが、手稿類は一切無視されている。この著作集は、1968-70年に西ドイツで再度刊行された(Carl Menger, *Gesammelte Werke*, hrsg. v. F. A. Hayek, 4 Bde. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1968-70) が、この再版にあ

っても、巻頭メンガー伝がドイツ語になり、脚注の形で二、三の新しい情報がつけ加わった他には変化はない。先に述べた Philosophia Verlag の企画では、Menger, C., Politik und Ökonomie-Gesammelte Aufsätze, hrsg. v. K. R. Leube and A. H. Zlabinger という論文集が予告されているが、これがどのような内容のものになるかは、まだ不明である。

メンガーの主著には、令息の手になる第二版 Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl., aus dem Nachlass hrsg. v. Karl Menger, Wien: Holder-Pichler-Tempsky, 1923 が存在する。メンガーは、第2版でも自らの見解を修正してはいないが、むしろそれを広く、人間の欲望と経済のいとなみの中で位置づけようとしている。それは、たしかに、理論的な発展ではないが、拙論にすでに述べたように『原理』の改訂は、彼が生涯自らに課していた課題であって、それがどのような方向を示しているかを知ることが、経済理論に対する反省の意味で興味をひくことであろう。私は、この『原理』第2版の邦訳を、⁽⁴⁾中村友太郎・中島芳郎の両氏と協働して刊行中であるがそこでは、初版との異同対照がおこなわれている。

ベーム＝バヴェルクについては、まずその主著『資本および資本利子』の各版本から説明しよう。彼の主著の現在入手できる版は、彼の没後ヴィーザーが刊行した第4版である。この再版は、テキストに関しては、第3版の無改訂版であるが、出版社が変わり、ページ付けと、第2巻『積極理論』の二つの分冊の編成の仕方も変わってきている。日本の図書館に入っているのは、ほとんど、この第3版ないし第4版である。これらの版は、初版とは、かなりの差異があるが、注意深い読者には、改訂によりつけ加えられたり、かきかえられた部分とそうでない部分の弁別は可能であろう。各版の書誌的データと改訂内容について以下にあげる。出版社は、3版までは同じである。

Kapital und Kapitalzins, Erste Abteilung, Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien.

[1. Aufl.] Innsbruck: Verlag der Wagner'schen Universitätsbuchhandlung, 1884, xii+499 S. この版は、「独創的な先達」Dem Bahnbrechenden Forscher メンガーに献じられている。

[2. Aufl.] Zweite vielfach vermehrte und verbesserte Auflage, 1900, xxxv+702 S. 序文でいうとおり、変更は余り多くないが、追加部分がかなりの分量になる。

(4) カール・メンガー、『一般理論経済学』、みすず書房（1. 1982年 2. 未刊）。

John Rae についての章と、「現代の利子論文献（1884—1899）」という付録が新設された他、特に注意を要するのは、メンガーとマルクスに対する批判の部分が、両者の新しい文献をふまえて書き直されていることである。後者については、「後継者の説くマルクス学説」という項も追加されている。もちろん、それ以外にも、かきかえた箇所や追加の注が存在しないわけではない。

〔3.Aufl.〕 Dritte durchgesehene und vermehrte Auflage, 1914, xxxv+747 S. 3版での改訂は、付録の「現代の利子論文献」が1914年にまで拡張されたことを除けば、多くない。

〔4. Aufl.〕 Vierte, unveränderte Auflage. Mit einem Geleitwort von Prof. Dr. Friedrich Wieser, Jena: Gustav Fischer, 1921, xxvi+546 S.

Kapital und Kapitalzins, Zweite Abteilung, Positive Theorie des Kapitals.

〔1.Aufl.〕 Innsbruck: Verlag der Wagner'schen Universitätsbuchhandlung, 1889, xvi+470 S. 序文の最後で、バームは、メンガーの論文“Zur Theorie des Kapitals” 1888 と、ヴィーザーの『自然価値論』1889 の二著作の利用が時間的に不可能であったことをことわっている。

〔2.Aufl.〕 1902, xxiii+467 S. 版型は初版（A5）より一まわり大きくなっているが無改訂再版である。その理由は、1900年にオーストリア政府の大蔵大臣に就任したために、改訂を完成する余裕がなくなったからだ、と「序文」に述べられている。

〔3.Aufl.〕 Dritte Auflage, Erster Halbband (Buch I—II), 1909, xxiii+210 (本文) +171 (余論) S., Zweiter Halbband (Buch III—IV), 1912 (ページ付けは第1分冊に連続, 本文S.211～652, 余論172～473それに人名目録)。改訂にあたって、個別の論点の詳述や論争は、余論としておこない、本文にはできるだけ手をつけない方針がとられた。14項ある余論のうち、12までがこの版でつけ加えられたものである。しかし、「価値と価格」の部が独立した他、第1部にある「資本概念をめぐる争い」は、かきかえられて倍近くなっており、また第2部第2篇「資本家的迂回生産の重要な並行現象」が新しく挿入されている。また、注については、かなりの変更および追加がみられる。

〔4.Aufl.〕 Vierte Auflage. Mit einem Geleitwort von Prof. Dr. Fr. Wieser, 2 Bde. (Erster Band: Buch I—IV, xxi+488 S., Zweiter Band: Exkurse,

350 S.), Jena: Gustav Fischer, 1921 本文と余論が別々にまとめられた他は、テキストは第3版と同一。

次にヴェイスの編集したベームの2巻の論文集 *Gesammelte Schriften von Eugen von Böhm-Bawerk*. Hrsg. von F. X. Weiß, Bd.1 u. Bd.2 (*Kleine Abhandlungen über Kapital und Zins*), Wien: Hölder-Pichler-Tempsky, 1924-26. があるが、編者の手になるベーム伝はものたりないし、また著作目録もかけている。はじめの巻が、ベームが最初に公刊した著作『権利・関係論』*Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre*, Innsbruck, 1881 の全体を収録したのは評価できるが、後に述べるように、当時編者の手元にあったはずの1876年利子論手稿の公表をきけたことは一体どのような理由によるものか、理解に苦しむことである。

次にヴィーザーであるが、彼の3つの主要著作 *Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes*, Wien: Alfred Hölder, 1884.; *Der natürliche Wert*, Wien: Alfred Hölder, 1889.; *Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft* (*Grundriß der Sozialökonomik*, Bd.1), Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), 1914, 2. Aufl. 1924. には、いずれもリプリントがあり、現在でも比較的容易に入手できる。(前二者は Sauer & Auermann, Frankfurt a.M. から1968年に、最後のものは1977年に同じ Mohr 社から、この有名な双書全体が再刊されている。)

ハイエクの編になるヴィーザー論文集 *Gesammelte Abhandlungen*, F. v. Wieser, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1929 には、ハイエクらしい敬意のあふれた伝記と詳細な著作目録がつけられている。ハイエクは、ベーム論文集の編者と異なって、手稿 *Ueber das Verhältnis der Kosten zum Wert* をも、付録としてこの論文集に収めているが、これは青年ヴィーザーがクニースのゼミナールで1876年におこなった報告の原稿である。

マニュスクリプト、書簡等

メンガーののこした大量の遺稿類は、令息 Karl Menger が父の全集を企図した際に、まとめて保存されたものと考えられる。しかし、この企図は、『原理』の第2版を世におくただけで挫折し、著作集の編者となったハイエクも、遺稿の整理・公表はきわめて困難であると判断した。その後半世紀以上を経た現在、遺稿のどれほどが残存しているかは不

明である。しかし、令息メンガーは、1971年にヴィーンで開かれた『原理』百周年記念シンポジウムで、彼の手に、父メンガーが微分を練習した1890年代のメモと、1867-68年の約20冊のノートが残っていることを明らかにした。⁽⁵⁾ 後者は、経済学の著作類からの抜粋帳であるが、そこには、彼の価値論についての最初の思考が散在している、ということである。このノートは公表されれば、カウダーの解説したラウ評注と並んで、『原理』の成立史に光をなげるものであろう。ともかく子息によるメンガー伝 (Philosophia Verlag) の公刊が待望される所以である。

メンガー文庫の蔵書類に含まれるメンガーの書きこみも、一種のマニュスクリプトと考えてよいだろう。彼の書きこみは、偶然の感興の産物ではなく、幾点かの書物についてはその内容を吸収し、批判しつくすために大量の書きこみが意識的におこなわれている。カウダーが解説したのは、そのうちの二つ、ラウの『原理』とメンガー自身の『原理』への書きこみであるが、前者は『原理』以前のメンガーの模索を、また後者は自著『原理』の改訂作業の（おそらく）前半期を物語る資料である。(Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk "Grundsätze", geschrieben als Anmerkungen zu den "Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre" von Karl Heinrich Rau, 1963. Carl Mengers Zusätze zu "Grundsätze der Volkswirtschaftslehre", 1961. いずれも一橋大学図書館刊行、タイプ印刷) 既に述べたように、私もリカードウ『原理』への書きこみの解説を公表している。("Menger on Ricardo - C. Menger's Notes on Ricardo's 'Principles of Political Economy' -", 『岡山大学経済学会雑誌』第13巻1号) その際のイントロダクションで、私はメンガー文庫の重要な書きこみ対象図書をあげている。重複をさけるため、ここでは著者名と整理番号だけを記す。

ラウ (Comp.266), メンガー (Mon.2142), リカードウ (Eng.1247) - 以上解説済み。
 スミス (Eng.1429), J・S・ミル (Eng.983), チュルゴー (Fr.1834), セイ (Fr.1438)
 バスティア (Fr.69), ケアリ (Eng.246), ペシーヌ・スミス (Eng.1448), クドラー (Comp.168), L・v・シュタイン (Comp.373), ロッシャー (Comp.287 B), クニース (Comp.152), クラウス (Mon.1704) また未確認であるがゴッセン (Comp.99)。

このような書きこみは、ハイエク文庫中のメンガーの『方法論研究』(FB/H 1238/1)

(5) Hicks, J. R. and W. Weber (eds.), Carl Menger and the Austrian School of Economics, Oxford: Oxford Univ. Press, 1973, p.44.

や、またジュネーヴ大学図書館所蔵のクナップ『貨幣国定学説』（1905）にもあり、私はそのコピーおよびマイクロフィルムを入手している。

メンガーの書簡については、ワルラスとの往復書簡（1883年6月28日付M→W，同年7月2日付W→M，1884年2月M→W，1887年1月27日M→W，同年2月2日W→M，同年4月4日W→M，1896年12月5日M→W）がジャッフェによって公表されており、数学的手法の意義をめぐっての両者のすれちがい⁽⁶⁾が明らかにされているが、さらに今春、ハイエク文庫で1884年12月29日のベーム＝バヴェルク発メンガー宛書簡と、85年元旦のメンガー発ベーム宛書簡のうつしが（再）発見されたことにより、以前に *Ekonomisk Tidskrift* のヴィクセル記念号 *Nationalekonomiska Studier*. 1921. S. 87 f. に公表された1884年11月13日付メンガー発ベーム宛書簡とあわせて、いま一組の興味深い往復書簡が利用できるようになった。これは1884年のベームの主著の第1巻でのメンガー資本用役論批判をひきついで論争を含む。メンガーは、自然主義的な財論にかえて、より一般的に人間の経済活動の対象をとらえようとして「営利機会 *Erwerbsgelegenheit*」という概念を提唱しているが、ベームはそれでも問題は解決しないとして、資本用役説の「二重計算」の批判をおこなっている。ここでもみられるベームとメンガーのすれちがいは、両者の資本理論のそれ以降の展開の方向の差異を示唆するものである。

その他メンガーの書簡としては、ヴィーン大学の同僚であった物理学者マッハ宛1906年10月3日付の儀礼的な書簡、同じく経済学の私講師であった S. ファイルボーゲン宛1911年6月26日付の伝記的な記述を含む書簡が公表されている⁽⁷⁾。なお、メンガー文庫には、ごく一部を除き1907年以降に属するメンガー宛の書簡および葉書約200点が保存されているが、学術的内容からみて価値のあるものは少ないと思われる。⁽⁸⁾

ベーム＝バヴェルクののこした資料としては、何よりも先に、ハイエク文庫に保存され

(6) これは5～10までのページ付けがされた手書きの写しで、FB/H1235/2のメンガー『原理』2版の見開きにはさまれていた。メンガー・ジュニアはこの2版の「案内」でこれらの書簡を計画中の父の全集に収録すると述べていた。

(7) 前者は *Philosophia Naturalis*, vol. 11 (1969), S. 485-6で J. Thiele によって、後者は *Journal des économistes*, sér. 6 tome 31 (1911), pp. 56-7で Feilbogen 自身によって紹介されている。

(8) この手紙の中には、長崎高商教授守屋源次郎の書簡（1907年2月20日）も含まれている。守屋は1904年にメンガーを訪問したことがあり、その時の印象を「経済学の泰斗カール・メンガー」（『日本経済新誌』、第3巻（1908年）10-12号）に記している。

ている1876年利子論手稿が紹介されねばならない。これは、ハイエク文庫の目録では、FB/H 1169 Boehm-Bawerk, Euge. v., Der Kapitalzins, Eigenhändige Niederschrift v. Eugen v. Böhm-Bawerk とされているが、その本体は64ページからなる標題のない手稿である。この手稿の発見の経過については、ハイエクが次のように語っている。

「ベーム＝バヴェルクは、『資本の積極理論』第3版第2分冊427ページ以下〔第4版では、318ページ以下〕の脚注で、自分の資本理論の要点は、1876年の未公表の習作にすでにかきとめられた、と述べている。これを読んだ私は、数年前、ベーム未亡人の所持になる彼の文書類の中にこの習作を探索した。私は、日付けのない1冊の小冊子を発見したが、それは問題の対象〔資本理論〕についての習作を明らかに含んでいた。ヴィーザーにこの発見を報じると、彼は私に、後にベーム＝バヴェルクの著作の第4版序言でもふれたように、これは当時クニースのゼミナールでおこなわれた報告に関したもので、ヴィーザー自身も同じ時期に上述の対象〔費用と価値の関係〕についてのレポートをおこなった、と話してくれた。彼は、件の小冊子が、まさしくかの習作であると確認してくれた上、彼自身のゼミナール報告の手稿も私に貸してくれた。このゼミナール報告は、この論文集への付録として印刷される。」

「この論文集」というのは、既に説明したヴィーザーの論文集である。(引用は、S. VIII) 再発見された1876年手稿に付されたハイエクのメモによると、発見の時期は「おおよそ1922/23年の冬」である。ヴィーザー 論文集巻頭のヴィーザー伝は、はじめ *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd.125 (1926) に、ヴィーザーの追悼文として公表されたものであるが、ハイエクはそこで既にこの手稿の存在を明らかにしている。彼はこの手稿をベームの論文集の編集にたずさわっていたヴァイスの手にゆだねたが、ヴァイスはこれを利用しなかった。そして、論文集の刊行後3年を経た1929年4月30日になって、再読してみたが、これを公表しないという判断は正しかったと思う、という手紙を付してハイエクにこの手稿を返却している。この手稿を『原「積極理論」』Ur-‘Positive Theorie’ とまでよびながらである。かくして、この草稿を公表する最上の機会は失なわれ、再び半世紀近く書斎の奥に蔵されたのである。

この手稿の内容については別稿で紹介するつもりであるが、チュルゴーの徴利禁止論駁 (*Mémoire sur les prêts d'argent*, 1770) を批判的に検討した上で、メンガーの価値論に依拠しながら、時間の差異にもとづく価値評価の差異が利子論のポイントであるこ

とを指摘したものである。ベームは、カノン法学者の微利不当論から、資本自体の価値(貸付金額)と離れたところに資本用役の価値が存在するわけではない、という彼の財論、そして資本用役説批判の基本方向を学び取り、唯一の途として時間要素の価値評価への影響に辿りついているのである。もちろん、この影響がどのようにおこなわれ、利子の高さがどのように決まるかは、彼自身認めるように、この手稿ではどのような方向も示されていない。しかし、それは、十数年後の『積極理論』でも、十分に説得的に、整合的に展開されたとはいえないのである。すでに述べたように、私はこの草稿を、メンガー＝ベームの往復書簡とともに、一橋大学社会科学古典資料センターの好意を得て公表するつもりである。

また私は、ウィーン大学の経済理論研究室で、Böhm-Bawerk Nachlass とよばれる11のボックス形式の文書入力を調査したが、それは多く抜き刷りや新聞・雑誌・報告書の類で、原稿類は含まれていなかった。ベームの蔵書も、一部がこの研究室の蔵書となっているが、ナッハラスにも蔵書にも書きこみはほとんどない。

ベームの書簡としては、1886年から1900年にかけてのワルラスとの往復書簡がある。(1886年11月18日W→B, 同11月20日B→W, 1887年2月2日B→W, 同2月13日W→B, 同2月23日B→W, 同3月5日W→B, 同3月9日B→W, 1888年8月1日W→B, 同8月7日B→W, 同11月23日B→W, 同11月26日W→B, 1889年5月5日W→B, 同5月20日B→W, 同7月19日B→W, 1896年12月26日B→W, 1900年11月2日W→B) ベームはワルラスに対して、最上の敬意を払っており、また『積極理論』完成中にもゲラを送付してワルラスの意見を求めさせている。その他には、すでに述べたメンガー宛書簡の他には、*Ekonomisk Tidskrift* 誌ヴィクセル記念号33ページ以下に、*Zur Zinstheorie Marshall's* として公表されたヴィクセル宛1907年7月5日付の手紙がある。

ヴィーザーについては、ワルラス宛書簡が2通(1887年2月12日付, 1890年6月18日付)公表されている他は、その残した資料類の行方についての情報は何ら与えられていない。

講義録 (Skripten) と講義・ゼミ

講義録発見の経過については既に述べたが、私がこれまでに確認しえた石版印刷形式の講義録 (Skripten) は、次の5種10点である。⁽⁹⁾

(9) 以下の記述は拙稿「メンガーの講義録」, 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第2号(1982, 3月)をかきあらためたものである。

- ① 岡山大学図書館黒正文庫 Kr.330. 1 M1618 [Carl Menger] Nationalökonomie, 現存S. 1—448それ以降欠。
- ② 同上 M1617 [Böhm-Bawerk] Nationalökonomie, 52 Bogen 412 S. ただし S. 3—6, 249—56は欠。
- ③ 同上 M1616 Repetitorium der Nationalökonomie, 15 Bogen 120 S.
- ④ Wien 大学図書館Ⅲ365.652 [Carl Menger] Nationalökonomie, 452 S.
- ⑤ 同上 Ⅲ398.505 Finanz-Wissenschaft von Prof. Carl Menger, 115 S+手書きメモ+目次。
- ⑥ 同上 Ⅲ365.653 [Carl Menger] Finanzwissenschaft, 184 S.
- ⑦ 同上 Ⅱ580.441 [Carl Menger] Finanzwissenschaft, 256 S.
- ⑧ Salzburg 大学図書館 81.262 Ⅱ. [Carl Menger] Nationalökonomie, 452 S.
- ⑨ 同大学法学部ハイエク文庫 FB/H 1171 [Böhm-Bawerk] Nationalökonomie, 412 S.
- ⑩ ⑨と合本されていた Repetitorium der Nationalökonomie, 120 S.

その他、戦災によって喪失し、目録にだけ残されたものとして、ヴィーン大学図書館 Ⅲ 398.506 [Carl Menger] Nationalökonomie がある。

これらのうち、④と⑧は同じ版のものであるが内容に関しては①も全く同一であり、また②と⑨、③と⑩も同じ版、さらに⑥と⑦はページ数は異なるが内容は同一である。つまり、メンガーの「国民経済学」（日本の大学でいえば、経済原論あるいは概論であろう。）講義（①④⑧）と「財政学」講義の二つのヴァリエント（⑤と⑥⑦）、ベームの「国民経済学」講義（②⑨）、さらに復習用教材（③⑩）の5種類である。

なお、メンガー文庫に Mon.317 として入っている Nationalökonomie nach Prof. Dr. Eugen von Böhm という標題の4冊の清書筆録は、ベームの講義に直接由来するものかどうか不明であるが、②⑨の前身なのかもしれない。少なくとも、構成上は、②⑨にきわめて似ているのである。

ヴィーン大学の図書館の目録では、④には「1890年頃」、⑤には「1888年頃」、⑥⑦には「1890年」、また喪失したメンガーの「国民経済学」については「1888年頃」という記載がある。⑤⑥⑦の成立年代についてはこの記載を信用してよいと思われるが、④については疑問である。この講義録には、1892, 93年の事象についての言及が存在するし、また⑧は

ザルツブルク大図書館の目録では1898年と記されている。その他の講義録についてみると、資料中の最新の叙述は②⑨では1902年、③⑩では1907年である。メンガー文庫の筆録冊子では、奇妙なことに1880年である。

次にこれらの講義録の内容であるが、構成を簡約化して示すことにする。

①④⑧「理論的国民経済学の叙述」と題された「第二部」の前に序論と学史的部分、後に「所得の理論」が配され、最後に労働問題や協同組合についての「付論」がある。序論部分では、人間の経済・国民経済、経済諸学概観、社会政策・社会主義との関係、方法についてを扱うが、学史部分の方が分量が多い。「第二部」でも、欲望・財・財の種類、所持財、資産、価値、価格、貨幣と40 S. ほどの順をおった叙述のあとに、通貨・信用制度の叙述が延々とつづく。「所得の理論」では、各論的に、地代・労賃・資本利子・企業利潤の順に論じられるが、理論的な叙述は制度的な叙述の中にはさまれている。

②⑨ 序論 (1. 人間の経済 2. 国民経済 3. 国民経済学の特質と歴史) 第一部 経済の基礎 (1. 欲望 2. 財 3. 財の価値 4. 資産) 第二部 財の生産 (1. 生産要素 2. 生産組織 3. 経済性原則の影響下での生産の態容) 第三部 経済的交易 (1. 価格 2. 貨幣 3. 信用) 第四部 財の分配 (1. 分配過程一般 2. 地代 3. 労賃 4. 資本利子 5. 企業利潤 6. 分配過程の結果) 第五部 財の消費 (1. 消費一般 2. 生産と消費の関連 3. 恐慌 4. 経済と人口)

③⑩ 総数73にわたる項目が標題なしの四部にわけて並べられている。各部にあえて標題をつけるとすれば、Ⅰ. 経済の制度 Ⅱ. 交換経済 Ⅲ. 経済政策 Ⅳ. 労働問題ということになるであろうか。

⑤⑥⑦ 目次のあるのは⑤だけだが、構成はほぼ同じである。

序論 (財政学の歴史他) 財政学の叙述 (経済の諸原理/国家経済と民間経済の相異)

A 予算論 B 国家の収入の体系

国家の経済的収入 Ⅰ. 私経済的収入 Ⅱ. 国家の経済的収入 a Regalien 王侯特権・特許収入権 b Gebühren 手数料 c Steuern 租税〔このa, b, c についての詳述が半分以上のページをしめるが、その内容は当時のハプスブルク帝国の実状に相応したものである。〕

ヴィーン大学のアルヒーフには、各年度の開講目録が保存されているので、経済学の講

義とその開講者の調査は容易である。(これは学期はじめに出されるものであるから、現実におこなわれた講義の記録とは異なる場合がある。)メンガーは通常は、週に5時間の「国民経済学」講義を冬学期におこない、夏学期には同じく週5時間の「財政学」講義と週2時間の「国民経済学—財政学演習 Seminar-Übungen」をおこなっている。ベームの「国民経済学」講義が開講目録にあらわれるのは私講師時代の1880年夏学期を除くと1905/06年の冬学期からであるが、彼はまだ官界にいる時分にも数回、週2時間の「国民経済学演習 Übungen」を開講しており、学界復帰後は、この演習は、通例夏学期に開かれている。ヴィーザーについて述べると、彼は1884年夏学期に私講師として「国民経済学」を開講したが、ヴィーンにかえてきたのはメンガー引退後の1903/04年冬学期からである。

この開講目録には、毎年の学部ごとの登録者数が記載されている他、時には聴講料まで記されている。オーストリア派の始祖達の所属した「法—国家学部」の正規の学生は、1890年代には2,000人台であるが、1900年代には3,000人台に達している。聴講料としては、たとえば1912/13年冬学期のベームの「国民経済学」の聴講料は、10.5クローネである。⁽¹⁰⁾聴講料が常時徴集されていたのかどうか、私は寡聞にして知らないが、ことすでにかなりの程度マスプロ化しているこの学部の人気講義（あるいは必修的講義）については、Skriptenの刊行が求められる十分な理由があるであろう。⁽¹¹⁾

当時の見聞者の報告としては、1892/93年冬学期をヴィーンですごしたアメリカ人学生 H. R. シーガーの生き生きとした記述 “Economics at Berlin and Vienna”, *Journal of Political Economy*, vol. I (March 1893) がある。そこではまだ、Skriptenの話は出てきていないが、彼の聞いたメンガーの講義の前半は、①④⑧の前半と一致する。(彼は、学期の途中に報告を母国におくったのである。)講義の性格についてシーガーは次のように述べる。「メンガー教授の聴講者の大半は必要課目の一部としてそのコースをとっている

(10) 当時の一般労働者の週あたりの賃金は20—24クローネ、官吏の給与は中程度で月額125クローネであった。(Kleindel, W., *Österreich—Daten zur Geschichte und Kultur*, Wien: Veberreuter, 1978, S.298.)

(11) Howey, R. S., *The Rise of the Marginal Utility School 1870-1889*, Lawrence: Univ. of Kansas Press, 1960, pp.173f. によると、当時のWienで法学博士号を得るには、3つの試験に合格することが必要であった。その第一は、カノン法・ローマ法・ゲルマン法、第二はオーストリア法であるが、第三は統計学・国民経済学・財政学からなっていた。また同じ箇所、1870、80年代の経済学の開講課目の記載がある。

学生である。したがって、経済学の概観を、つまり経済の原論だけでなく、経済思想史から実際の経済にいたる一応の概念を、80回の軽妙なレクチャーで教えこむのが彼の課題なのである。」

それに対して、ベームのゼミナールの方は特定テーマにしぼって系統的なレポートを準備させた上での、討論中心の内容高度なものであった、とシーガーはいつている。40人近い参加者は、ほとんどがメンガーかベームの教えをうけたもので、皆オーストリア学派の熱心な戦士であった！

メンガーのゼミナールがやはり、細心に準備された論文をもとに討論中心におこなわれる高度なものであったことは、ハイエクのメンガー伝に述べられている。それには「上級学生の選ばれた一団と、だいぶまえに博士号をとった大勢の人々が集まった。……メンガーはおもに学生達に語らせておいたが、その論文の準備を授けるのに底知れぬ苦勞を払っていたのである。」ハイエクの評価では、「彼の教師としての偉大な才能は、そのゼミナールで最もよく示された」のである。

このようにみえてくると、現在残っている講義録は、メンガーおよびベームが、ハプスブルク帝国の高等教育の担当者として果した課業（「国民経済学」と「財政学」は、官吏となるには必須の素養である。）を示すものであっても、学派形成の内面的過程を示すものとはいえないかもしれない。オーストリア学派のオーラル・トラディションは、ゼミナールの討論や個人指導そしてカフェーでの談笑でつちかわれたのであろう。

しかし、国家の課題にこたえることは、オーストリアンにとって、決して自らに異質な要請ではなかった。たしかにオーストリアンは、ドイツ帝国の学者達のように、権力を礼賛する国家主義者ではなかった。しかし、私達は、オーストリアンの“個人”主義を、ハプスブルク帝国の市民階級（その多くは、ドイツ系あるいはユダヤ系の商人、官吏である。）の土壌において考察し、それと同時に“国家”の要請をも、イモビリズムともまがう漸進主義をとった帝国の官僚機構から把えなくてはならない。W.M. ジョンストンは、この帝国を“官僚の帝国”と特徴づけた。⁽¹²⁾ 制度は権力が創出するものではなく、諸個人の個人的利益をめざした運動のおもわざる結果として成立し、権力はそれに後から形を整え強制力

(12) Johnston, W.M., *The Austrian Mind*, Berkeley: Univ. of California Press, 1976.

を付与するにすぎないという、メンガー流の歴史哲学にしても、それはもしかすると、オーストリア風の官僚機構に合致するかもしれない。ともかく、メンガー、ベーム、ヴィーザーの3人は、いずれをとっても、青年時代に官庁に勤務するとともに、学者となってからも国事に参与した経歴をもっているのである。ベームは3度大蔵大臣を勤め(1895, 1897-98, 1900-04)、ヴィーザーも第一次大戦末期に商務大臣となった。メンガーの場合には、この2人のような直接の参与とはいえないが、1876年にルドルフ皇太子の教育係の一人となり、また1892年には、オーストリア通貨調査委員会に参加した。しかし、こうしたオーストリア学派始祖達の国事へのかかわりについては、私の資料探索はまったく及んでいない。

〔付記〕 資料収集にあたって、次にあげる方々、および諸機関に御助力いただきました。記して感謝の意を表します。

Prof. F. A. v. Hayek, Prof. E. Kauder, Prof. Th. Dams (Freiburg i. Br.), Prof. E. Streissler (Wien), Prof. A. Kyrer (Salzburg), Dr. Selinger (Wien), 井上琢智氏 (大阪商業大学), 青山孝徳氏 (名古屋大学), 一橋大学社会科学古典資料センター, ヴィーン大学図書館, 同大学アルヒーフ, ザルツブルク大学図書館, 同大学ハイエク文庫, 長崎大学図書館経済学部分室, そして岡山大学図書館。

また、資料の収集に関して、昭和54年・55年の両年にわたり、文部省科学研究費補助金をうけました。